

聞一多評傳

目加田, 誠

<https://doi.org/10.15017/2332885>

出版情報 : 文學研究. 52, pp.63-83, 1955-06-20. 九州文学会
バージョン :
権利関係 :



聞一多評傳

目加田 誠

一九四六年七月十五日、昆明に於て、中国の代表的な詩人且つ古典文学研究家であつた聞一多は、国民党の特務のために暗殺された。その後直ちに彼の遺稿が集められ、主として彼の十数年来の同僚であつた朱自清の一年余に亘る努力によつて、全集四巻が開明書店から出版された。郭沫若は之に序して、「千古の文章未だ才を尽さず、今日私は聞一多の遺著を全部讀んで彼の成績の卓越せるに驚嘆し、なお中国人民のために、人民本位の中国文化の批判工作のために、無窮の隱痛を懐かざるを得ぬ。一人が倒れて千百万人が起つという。革命工作上にあつて、私は衷心からかくあらんことを希望する。人民のために服務する學術工作上に、私はまた衷心からかくあらんことを希望する。」と書いた。又李広田は聞一多選集（開明版）の序に、「聞先生の才能は多方面であつた。只文学芸術方面のみにつて言へば、彼は詩人であり、画家であり、彫刻家であり、戯劇家であつた。もし彼がその全力をこの方面の工作に傾けたら、彼はこれらの方面のすべてに偉大な成就を見せたであらう。然も彼はかくすることなく、却つて彼の

生命と鮮血とをもつて、最も壯麗な詩篇を書き、最もすぐれた英雄の姿を彫繪した。」又こうも云つている。「聞先生の道路は曲折して進んだ。矛盾に満ちていた。而もまた終に種々の矛盾を克服して邁進した。恰も長江大河が、平原曠野を奔流するのでなく、千山万壑の間を横衝直闖して、最後に壯闊なる波瀾をなして、一瀉千里、真理の大海に向つてつき進むようなものであつた」と。まことに聞一多の歩いた路は迂余曲折にみちたものであつた。而も常に或は愚直にも似た一途な歩み方であつた。彼の生涯は又五四以来の中国智識階級の一つの典型を示すものと言えるかも知れない。この人の一生の足どりをたどることは、私にやはり或る切実な印象を与えるものがあるのである。

清末の光緒二十五年（一八九九）、湖北浠水巴河鎮に生れた聞一多は、従つて辛亥革命の時は十三才、民国八年の五四運動の時は二十一才であつたわけである。

聞一多、姓は聞、名は家驊、又の名は亦多。字友三。号友山。後

北京清華學校に入つて名を多と改め、筆名を一多と号した。家は地方の名望家で、六才、師について三字経、幼学瓊林、爾雅と四書を読んだが、翌年七つの時には新に師範学堂出身の先生を招いて、新らしく編纂された国文・歴史・博物・修身などの教科書を習っている。湖北の田舎にも、当時の新思潮、新教育の波が及んで来る頃なのであつた。十一才、武昌の兩湖師範附属小学に入り、同時に叔父の主宰する改良私塾で、国文、英語、数学を習つたが、宣統三年辛亥の年（一九一）即ち彼十三才の時、武昌に革命の旗上げあり、難を避けて家に返る。この革命の騒ぎは、いわゞ幼い彼のかたわらを只通りすぎたのであつた。

民国になつて二年、十五年の年、北京清華學校が学生を募集し、湖北省から採用する二名の中の一人にあつた。当時から書癡といはれたほどで、本をよんでいと、むかでが足に匍いのぼつても気がつかない風だつたと彼の長兄が云つているさうで、この人には何かこうした迂遠な性格が始めからつきまといつてゐる。その頃彼が愛したのは梁啓超の文章で、そのほか史記とか漢書などをよみ、又中国の詩詞を好んだ。経学を第一とする父親の伝統的教育方針とは対立しがちだつたが、之は已に此の頃の一般青年の風潮であつた。それにもう一つ、小さい時からの趣味は剪紙と絵画で、美術愛好はこの人の生涯の癖となつたのである。

民国五、六、七、八と清華學校に在る間、清華週刊の編輯に加わり、陸續と筆記詩話の類を發表する。古詩や絶句を作り、又賦を綴つた。民国八年の二月、学報の編輯會議で、白話文学を提唱する者があり、「おおむね之に附和す。如何ともすべき無き也」と聞一多がいっているのは面白い。民国六年以来の白話運動は、北

京大学を中心として動いて居つて、清華でも此の頃漸く白話採用ということになつたわけだが、聞一多は必しもそれに快くはなかつたらしい口調である。この年の五月四日、所謂五四運動が起り、北京城内の学生が、「外、強權に抗し、内、国賊を除く」の愛国示威運動を展開した。その消息が郊外の清華園に伝わり、清華の学生もすぐに之に応じた。翌五日の朝、食堂の入口に、紅い紙に往昔の愛国の志士岳飛の滿江紅の詞を書いて貼つたものがある。後にそれは聞一多のしわざと知れた。七日になると清華の学生は代表団を組織し、城内の学生と聯絡をとり、行動を共にした。聞一多は書記の仕事を引き受けた。後から見るとあれ程重大な意義をもつた五四運動だが、それに際会した学生聞一多にあらはれた反応はこれであつた。

しかし流石にこの頃から、彼の文章は白話体になり、詩も従来の旧い形をやめて、九年の七月始めて新形式の詩、「西岸」を發表した。十月、「時間の教訓」、「黄昏」、「印象」、翌年は「美と愛」、「愛と風波」などの詩を引きつゞき發表。之以後は再び五七言の旧形式の詩は作らなかつた。同時にこの頃から已に新詩の音節ということに注意して居り、やがてそれが彼の詩の特色となり、彼の主張となつて行つた。

死

民国十一年（二十四才）には新詩を続々と發表した。たとえば、

おゝわが靈魂の靈魂よ

わが生命の生命よ

わが一生の失敗、一生の缺損は

いますべてお前に向つて償ひを求めぬ

我をして汝の眼睛にたゞえた水波に溺れて死なしめよ

我をして汝の胸の鎔鑪に焼かれて死なしめよ

我をして汝の音楽のうまさげに酔うて死なしめよ

我をして汝の呼吸のかぐはしさに悶えて死なしめよ

さらずば汝の尊厳をして我を羞ぢ死なしめよ

汝の冷酷をして我を凍死せしめよ

汝の無情なる齒牙をもて我を齧みて死なしめよ

かの薄情の毒剣をもて我を刺して死なしめよ

お前が私に快樂をくれるなら

私は楽しんで死なう

お前が我に痛苦をくれるなら

私は苦しんで死なう

死は私のお前に対する唯一の要求

死は私がお前に対する無上の貢献だ

(十一年四月)

五月、九年間の清華の学生生活を了り、海外留学の準備にかゝり、一旦帰郷、郷里では紅荷之魂などの詩を作り、同時に李義山詩目提要を作り、陸放翁をも讀み耽つた。

七月十六日出帆。船上の生活は予想した樂しさも無く、むしろ痛苦だつたようで、途中日本に立ち寄る。

おかしいのはこの時の日本寄港のありさまで、始め神戸に着き、清水に寄り、横浜について、電車で東京に出たらしい。大正十一

年のことである。日本の自然は美しい。たゞ目に見る風景は何も彼も彼には小さく映つた。東京では平和博覧会が開催されている時で、好きな美術展覽会があり、一日で見足らぬので翌日又東京に出る。ところが日本人のガイドが無理に有名な三越をこの中国人に見せようと、強いて連れて行つて、そこを出るともう時間が無かつた。馬鹿な話だと口惜しがる。又前日東大英文科の学生だという青年と料理屋で知り合ひ、二日目にはその学生が横浜の船に来て、聞一多の帰りを待つていた。彼は聞一多の詩を見せろというのだが、しかし中国語は皆目わからない。彼は Yeats が好きだといつて暗誦して聞かせる。次は Christina Rossetti の作品を暗誦し、頭をふり目をとぢて、そのくせさつぱり味気ない調子で暗誦をつゞけ、船が出るときになつて、やつと手を握つて別れた。何もこちらが頼んだわけでも無く、その又暗誦の調子が全然感じも出ていないのに、「魔にとつつかれたやうに暗誦し暗誦する、精神病ではなからうか」云々という手紙を友人梁実秋に寄せている。まことに滑稽なこと乍ら、何か思ひ当る話でもあるようだ。

八月七日シカゴに到着、美術館や映画を見たが、一週間も立つと、もうこの街の生活に厭気がさして来た。が、之から三年間(民國十一年七月——十四年七月)の米國に於ける留學生活が始まる。彼が在米中の仕事は、一、絵畫の勉強。二、詩の創作。三、劇の演出であつた。

はじめシカゴ美術學院に入り、翌年の秋、コロラド大学の美術科で油絵を学んだ。髪を長く伸ばし、黒ネクタイで画室着を着て、繪具に汚れて暮してゐたという若い日の些か氣障な聞一多の姿で

ある。紐育の画展に出品することになつて、一月あまりは寢食を忘れ、氣違ひのような精進ぶりで、珈琲沸しのアルコールランブを覆して、頭髮がら肩まで焼いたのもこの時だつた。しかし彼は絵画の勉強と共に、作詩の精進をも怠つていない。むしろアメリカに来て後、詩への熱情は益々強まり、やがて詩集紅燭の編集となる。(十二年九月刊行)この頃の愛誦した詩人は、李白、杜甫、陸放翁、などの中国詩人のほか、バイロン、キーツ、テニスン、シェンリーであつた。後にコロラドではおかれて留学した梁実秋と共に近代詩の講義をきき、テニスンとブローニングの講義にも出、キップリングの節奏、ハーデー、ホイットマンの情趣に影響を受けたといつて居る。「紅燭」に収められた詩篇を見ると、当時の彼の文学思想が明かにかゞえるであらう。之について李広田はいう。

「聞先生の道は詩から始まつた。且つ又一個の極端な唯美主義者であつた。彼は半封建半殖民地社会の中の世家望族、書香門弟に生れ、又十年間、アメリカ化された清華学校の教育を受け、アメリカに渡つては又美術絵画を学んだ。これが即ち彼を一人の唯美主義者に成した社会根底である。家庭に於て、科挙は既に廃止されていたけれども、詩歌賦は依然として必修の学問であつた。更に清華で西洋の文学芸術を学習したことも、又彼をして浪漫主義の色彩に染まらせた。アメリカでは更に多くの、彼をしてロマン主義詩人とならせるに都合のいふ条件があつた」云々。彼はキーツを芸術の忠臣とうたい、芸術の殉死者と讃えた。ルバイヤートを愛誦したのもこの頃の彼らしいことである。芸術の為の芸術をいひ、唯美的な、浪漫的な、色彩絢爛たる詩を多く作つたの

である。

而も我らは「紅燭」の中に、同時にもつとはげしいあるもの、即ち彼の故国に対する思慕の感情を見出さなざらうか。

太陽よ、これはわが山川、わが太陽に似ても似つかぬ

この地の風雲は、まるで異様な色を帯びている

この地の鳥の歌はことに佻しい調べをもつている(太陽吟の二節)

この詩と、今一つ晴朝と題する詩とを書いて、吳景超に送つた手紙に曰く、「この最近の拙作を見て、私のこの頃の心情がわかつてもらえるだらう。国を出ねば家を愁うる味はわからぬ、とは先達某君への手紙に書いたところだが、君も明年この日、この句の意味を知るだらう。私は君がこの詩をよんで、まさか私の想うのが、狭義の家だとは誤解すまい。そうではないのだ。私の想つているのは中国の山川、中国の草木、中国の鳥獸、中国の家屋、中国の人なのだ。」

又故郷の両親にあてた手紙には、

「……且つ米國は我が久しく留り得る地には無之候。一個の中国青年が、米國に留ることの苦痛は筆墨のよく形容する所に非ず、明後年の年末、我家に歸りて越年致さむときを俟つて、まさに家人と炬を囲んで架談し、痛哭流涕して以てわが積憤を洩らすべく候、我は國有るの民なり、我に五千年の歴史と文化有り、我何ぞ米人に若かざるあらん。將に吾人が殺人の銃砲を製する能はざるを以て、彼の文明に若かずと謂はむとするか、之を總するに彼のわが國人を賤視するもの一言にして尽し難く候……」

洗衣の歌はいつ書かれたか分らぬ。(詩集死水に収めらる)が、い

づれこの当時の感情を告訴したものとと思われる。序言に曰く、
洗衣は在米華僑の最も普遍的な職業である。故に留學生は常に
人に尋ねられる、君の親爺も洗濯屋か？と。

一枚 二枚 三枚

クリーニングは清潔に

四枚 五枚 六枚

アイロンは 万遍なく

私は洗い清める、悲しみに濡れたハンカチを

私は漂白する、罪に黒ずんだ汗の着物を

貪欲の垢と情慾の焰の灰と

君の家の一切の汚いものを

私にわたして洗はせろ 洗はせろ

金銭はかくも臭く、血はかくも腥い

汚れたものはすてゝはおけぬ

洗つてもまた汚れるが

君ら辛抱強い人はかまいもすまい

彼らのために、洗え、洗え……

君はまさか云うまい 洗衣の商ひは余り賤しい

賤しい仕事をするのは「唐人」だけだと

君たちの牧師は私に告げた

イエスの父は大工の出だと

君は信ずるのか、信じないのか

シャボンの泡から何も仕出かすことは出来ぬ

着物洗うはもとより軍艦を作るには比べられぬ

私だとして知つている、これが何の見込も無い仕事だと

血の汗流して他人の汗を洗うのだ

君らに出来るか、出来るかよ

来る年も来る年も故郷恋しい一滴の涙

夜更けてクリーニングの一盞の燈火

賤しいか賤しくないか君らの知つたことではない

どこが汚れてるか、皺がよつてるかをこそ

「支那人」に問へ「支那人」に

私は洗い清める悲しみに濡れたハンカチを

私は漂白する罪に黒ずんだ汗の衣を

貪欲の垢、情慾の焰の灰を

君の家の一切のきたないものを

私に渡して洗はせろ 洗はせろ

一枚 二枚 三枚

クリーニングは清潔に

四枚 五枚 六枚

アイロンは万遍なく

この詩の原形は最初と最後の節が同じ四句のくりかへし。間の六章は各章四句で、一句十字に整えられる。それに各章の終りに四・四の句を加える。こうして殊更に形式をととのえるのが聞氏の詩の特色である。

民国十一年十一月、梁実秋と合著で冬夜草兎評論を刊行した。

(冬夜は兪平伯、草兎は康白清の詩集。聞一多は冬夜をうけもつたが、こゝで特に冬夜の作者の、音節に関する工夫に注意し、作者の貢献をたゞえた。聞氏によれば、新詩には新詩の音節を工夫すべきで、胡適が自分の嘗試集を純粹な自由詩だと誇っているのは実はおかしい。旧詩や旧詞曲の音節は、決してその詩、その詞曲自身の音節ではない。音節の可能性は夫々の言語の中にあり、ある一つの言語には夫々の天賦の音節がある。声調と音の本体は、文字の中に含まれる要素であり、この要素が詩歌の芸術に発して節奏となり、平仄、押韻、雙声、疊韻等の表象となる。普通の言語には殆どこの種の潜伏の可能性は表現されぬが、情感を重んずる語言に於て始めてこの働きが現れる。詩は熱烈な情感の蒸発する水蒸気を凝結させたものだから、この種の潜伏的な美を充分に表現することが出来る。云々。こうした考えから兪氏の音節に関する鍛練を賞讃したが、同時に兪氏の詩の意境の低さ、幻想の空虚さを指摘することも忘れない。この長い論文を讀んで共鳴したのは郭沫若であつた。聞一多がそれを知つてどんなに喜んだか、家人に送る手紙に、

「今朝梁実秋からの手紙によれば、郭沫若が日本からたよりを寄せて、私たちの冬夜草兎評論に同感を表して来たさうで、郭氏の

文に、『まつくらな夜に二つの明星を見たやうな、又炎天に二杯の清水を飲んだやうな気がした。海外に在つて両君の評論をよみ、荒野に人の足音を聞く思いがした』とあつた由。胡適主宰の努力週刊や上海時事新報附刊文学旬刊には反対の言論が見えるが、要するに私は、たとえ全国の人がすべて反対しても、只郭沫若が賛成してくれれば満足するのだ……」

又実秋への手紙には

「郭沫若が手紙を呉れたという消息は、私を喜ばせて、気も狂ひさうだつた。我々はいつてもこの人を讃仰して止まなかつたが、今日に於て、竟に彼は我らの確実な同調者であることを証した」云々。

この郭沫若に対する敬慕は、郭氏が同じく異国日本にあつて浪漫主義、愛国主義詩人として出発したことを思い合せれば理解出来る。郭沫若の詩集女神に対して、聞一多は「女神の時代精神」と題して、その詩にあらはれたものが全く二十世紀の時代精神であることを言つた。二十世紀は動の世紀であり、反抗の世紀であり、科学の世紀であり、ユスモポリタニズムの世紀であり、悲哀と興奮の世紀であり、暗黒の世紀である。しかしその暗黒は黎明を導き出す暗黒である。二十世紀は死の世界だが、その死は更生を予言する死である。これが二十世紀の姿であり、ことに二十世紀の中国の姿である。この世紀の精神を見事に現はしたものである。云々。けれども彼はもと／＼「女神」に対して一つの批判をもつていたので、それについて「女神の地方色彩」という論文がある。それには、現在の新詩人には、皆一種欧化の狂癖があると指摘し、女神も形式が欧化しているのみでなく、精神も全く欧化している。

一般の人は之でこそ新詩だと見るかも知れぬが私の考は少し違ふ。詩は一切の芸術と同じく、世界の時代精神と作家の地方色(この場合民族性を意味しているであろう)との織りなす錦であるべく、そこに獨創性ということが生れるのだ。中国の旧詩は大体からいつて時代精神の變化というものが無いし、中国の文化全体がそうだったのだ。こゝに新思潮の波動は、我らの求める時代精神の目覚めであるが、それが一転して行きすぎとなり、本地の文学——民族性——を忘れ去つた。現在の新詩の中にあるものはデモクラシーであり、タゴールであり、或は心の琴線であり、洗礼であり、とかく西洋の名詞ばかりを好んで用い、われらの中国、四千年の家柄はどこに行つたのか。女神の中にも徒らに西洋の名詞を並べすぎる。アポロだ。ピナスだ。キュービットだ。バツカスだ。プロメシウスだ。鳳凰といつても中華の鳳凰ではなく、フェニックスなのだ。作者の羨やむ工人は、炭坑の工夫であつて、中国の人力車夫ではない。

思うに女神の書かれた頃、作者は欧米文化に盲従せる日本に住み、讀んだ書物も西洋の書物で、彼の見聞するところ、想念するところ、すべてが西洋のもので、之は一種畸形的な情況だ。しかしそれにしても私の疑点は、作者の中国文化に対する距りで、彼は祖国を情緒的には愛するけれども、祖国の文化を理智的に瞭解しようとはしていないのではないか。

人或は世界文学を提唱する。真に好き世界文学を建設しようと思えば、只各国文学が充分その地方色を發展させ、同時に又一種共同の時代精神を以て貫き、然る後併せて之を觀れば、各種の色彩相異なる中、又相互に調和して、芸術の所謂「変異中の一律」に

相符するであらうと。

聞一多はこのようにして、一面芸術のための芸術を言い、極端な唯美主義者と呼ばれつゝ、同時にいつか祖国愛に胸をもやし、祖国の文化への郷愁を深めて行つた。絵画についても、次第に洋画に疑いを持ち、中国古来の画の方にむしろ高いものがあるのではないかも考へ出し、「終日考へて解決がつかぬ。もし解決がついた時は、私は直ちに家に歸るだらう」と、弟への手紙に訴えていた。

一九二四(二十六才)コロラドから紐育に遷る。Art Students' League of New York に入つたが、彼の興味はこのとき演劇に移り、オニールの劇を見て感激したり、翌年の春はボストンで顧一樵が琵琶記を演出することになつて、梁実秋、謝文秋、謝冰心、王国秀、沈宗瀚、徐宗洙らが出演した時、聞一多は趙太侔と一緒に紐育から来て、趙は舞台設計、照明を引きうけ、聞一多は背景、衣裳をうけもつて、御衣の哀麗を油画具で画いたり、碧海紅日に鶴の屏風を画いたりして夢中であつた。

けれども結局彼は詩人である。彼と紐育で演劇活動を共にした劇作家・演出家の熊仏西の追憶に、(全集年譜四五頁)「憶ひ出せば一九二四年、私たちがアメリカで勉強していた頃、君は国事に対してあのように熱心だつた。君は当時の軍閥が横行していることに對して、あのように痛恨していた。君は色と線とに専ら憑つていては、君の思想と感情とを表現するに足らぬことを覺り、祖国と人民とに對するあの熱愛を傳達するに足らぬことを覺つた。そこで君は改めて文学に専心した。特に力を詩作と詩の研究に致した。欧米各国の愛國詩人の作品を愛誦し、いつも私に向つて、詩

人の天賦は愛である。祖国への愛と、人民への愛だ、と云つていた。そして詩の創作に寢食を忘れた。私は当時、君と一緒に住んでいたのだから、まづ先きに君の詩を讀む光榮を有した」といつてゐる。

一九二五年（民国十四年）四月、孫文が北京で逝去した報が伝はり、中国留学生は追悼会を開いたが、その折、掲げた孫中山の遺像は聞一多が画いたものであつた。彼は又孫文を頌して「南海之神」という詩一篇を書いた。（但し之は後に発表されなかつたらしい。）

已に異國に蟄居するのは謫戔と異ならぬ（梁実秋への手紙）とかこつた聞一多は、遂にその年五月、三年の留學期間を了えて、余上沅（劇作家）、趙太侔と同船して帰國の途についた。李広田は云つてゐる。「彼は米國から文学芸術各方面の研究の結果を持つて歸つたが、同時に愛國主義を抱いて歸つた。彼は國家主義の爲めに努力しようと決心した。これが彼の留學の結果であつた」。

だが彼がそれほど憧れて歸つた祖国はその頃どんな状態であつたか。

彼が歸國したその月（一九二五、五）三十日には所謂五卅事件が上海に起り、之をきっかけに中国各地の工場でストライキが始まり、世界的な階級闘争の風潮が中国にも押しよせて、労働運動の支持、軍閥の打倒が叫ばれ、労働階級の領導による反帝國主義民族解放運動となつて現れた。革命半ばにして死んだ孫文の遺志をうけて、七月には國民政府が広東に成立したが、全国にわたるこの革命の氣勢に対して、之を弾圧しようとする北方軍閥の勢力は

いよ／＼横暴に、混乱と矛盾は中國に満ちていた。聞一多は叫んだ、

私は歸つて来た！ 私は血涙を迸らせて叫ぶ。

「これは私の中國ではない。違ふ、違ふ！」と。（發現——詩集 死水の中）

彼は歸國後、一旦郷里にかえり、九月北京に出て、余、趙兩人の主宰する芸術専門学校の教務長となつた。已に國家主義者をもつて任じた彼は、彼の屬する國家主義の団体の機関紙の大江季刊（十四年七月創刊）に、長城下の哀歌。我は中國人。洗衣曲（前出）などの詩を発表した。その雑誌の売行きよく、彼の詩も紅燭時代より勝ると評されていると得意になつてゐるが、翌一九二六、一月、梁実秋に送つた手紙に

「国内には赤禍猖獗で、我ら國家主義者はこの際ことに責任重大であり、行く手は益々困難を加える。國家主義と共產主義は勢い最近の期間に於て劇しい戦闘をするだろう。——我らは已に醒獅その他の団体と手を握り、一個の北京國家主義団体聯合会を組織した。その勢は日に／＼大きくなりつゝある」と書いた。

そこへ起つたがあの三、一八事件である。一九二六、三月十八日、学生の愛國デモを弾圧しようとして、段祺瑞の軍閥政府は突如學生に銃火を浴せ、無辜の犠牲者を出すという非常な慘事を起した。この事件に直面した魯迅が、この日を民國以来最も暗黒な日として、あの痛切な文章を書いていることは（花なき薔薇）人も知るとおりである。この事件をそれでは聞一多はどういう風に受け取つたか。

聞一多はこの事件に関して、「天安門」という詩をかいた。又徐志

摩の主編による北京晨報副刊詩鐫第一号に、文芸と愛国と題し、三、一八記念の文章をのせて、文芸の愛国主義を掲げた。

「……陸游は七十の衰翁にして涙を龍牀に灑いで北征を請ひ、バイロンは戦場に死なんことを願うた。バイロンの最も完全、最も偉大なる詩は、即ちこの一死であつた。我らは思う、この志士たち三月十八日の死難は、たゞに愛国というのみならず、且つ最も偉大なる詩である。我らもし死難者の熱情の一部だに得れば、すなはち文芸上に於て大成功を得るであらうし、若し死難者の熱情の全部を得れば、すなはち彼らの跡を追つて、身を殺して仁を成すことが出来るであらう。」

之をあの魯迅の憤りに身をふるわせ、筆にかゝれたものは竟に空言だと叫んだのと比べると、何という距りであつたらうか。

けれども聞一多も、帰国後の国内政治の暗黒さには今や全く絶望せざるを得なかつたのである、その上彼の勤め先の芸専の内紛は、いよ／＼その憂鬱を深めていた。北京の寓居には国家主義の同志が度々会合を開き、又新月社は毎週一回晚餐を共にし、詩人徐志摩はいつも之に來合せた。徐の主編による晨報副刊の詩鐫は、詩人団体の刊物で、聞一多の寓居は彼らの集会所だつた。彼が死水・黄昏その他多くのすぐれた詩を發表したのもこの刊物の上であり、詩の格律を論じたのも又この紙上であつた。

死くさ水みづ

こはこれ一溝の絶望の死水

清風吹けども些かの波も起たぬ

むしろこゝに多くの鉄屑を投げこみ

汝の残飯を投げ入れるがいゝ

あかぬ

銅は翡翠なす緑をなすかもしれぬ

鉄罐はさびて桃花の色を現はすかもしれぬ

さらに油は浮いて綺羅を織りなし

黴菌はこゝに雲霞を湧き上のぼらせるかもしれぬ

死水をして一溝の緑酒を酔よさしめよ

珠の如き白き泡を一めんに漂はせ

小さき珠は笑いつゝ大いなる珠となり

又酒偷ちゅうむ花蚊かぶんに敵かみ破られる

さらば一溝絶望の死水も

幾らかの鮮明せんめいさを誇りえよう

もしも青蛙が寂寞に耐えねば

死水にまた歌声がきこえるというもの

こはこれ一溝絶望の死水

こゝは断じて美の所在ではない

さらばむしろ見るがいゝ、醜惡をして來り耕やさしめ

彼がいかなる世界を造り出すかを

死水とははけ口無く、溜つて流れぬ水である。それは腐つたどぶの水である。こゝに彼の絶望、痛恨が表現される。之は決して悪の華の讚美ではない。抜け出る道の無い絶望感がこゝにある。詩の格律について聞一多の主張は已に冬夜評論にもべられてい

るが、十五年五月詩鐫七号に「詩の格律」の論文を載せた。彼らの仲間、詩人としては徐志摩の方が世間に知られたが、詩の理論に關しては聞氏に及ぶものは無かつた。聞一多は詩の格律 *Form* を非常に重んじ、詩に格律を要しないなら、碁を打つよりも易しいことだ。近來雨後の筍のように新詩が出来るのも尤もだといっている。詩界の革命家は、「自然に返れ」というが、しかし自然界にも格律があり、たゞそれは完全でないことが多いので、芸術を以て之を補うのだ、「自然の終点が芸術の起点」である。自然は決して長くが美ではない。自然の中の美とは、自然が芸術に類似している時なのだ。もとより自然の中にも美は発現するが、それは偶然なので、偶然は言語の中にも一点詩に類似した節奏を発現することがある。だからといって言語即ち詩だといって、詩の音節ということ認めないのは詩の自殺ではないか、土語で詩を作ることに反対するのではなく、むしろ土語こそ新詩の豊かな領域だが、土語で作るといふことは、土語に一番の鍛錬選択の工夫を加えることである。凡そ魄力ある作家は、格律の桎梏をはめてこそ益々見事に跳舞する。格律はむしろ詩人の表現の利器である。と。詩の格律を論ずるに、具体的には、節の均齊、句の均等。それに音尺、平仄、韻脚について論じた。音節が音楽美、詞藻が絵画美なら、章句は建築美であると言ひ、こゝに又中国文学特有の——方形文字による——視覚的要素をも利用すべきことをいつた。元來中国で格律をやかましく言つたのは所謂五七言の律詩であり、之亦建築美を具えたものだが、今こゝでいう新詩の格式は之とやゝ異なる。かの律詩は永遠に變らぬ一つの格式であるが、新詩の格式はいくらでも變化する、律詩では何を詠じても同じ格式にはめこ

むが、新詩はその内容、精神に相應してその格式を自ら定める。律詩の格式は他人がきめたものだが、新詩の格式は隨時自ら構成する。故にこゝで格律をいうのは、決して詩の復古ではなく、詩の創新である。

こゝの所を前掲の死水の例を以て考えると、

この詩は五章から成り、各章四句、各句は九字に整えられる。そして各句は皆三つの二音小節と一つの三音小節から成つている。

這是一薄 絕望的 死水

清風 吹不起 半点 漪淪

不如 多扔些 破銅 爛鉄

爽性 發体的 臘菜 殘羹

この詩の例は最も代表的である。こうした点については、胡適の嘗試集の行き方に甚しい不満を見せ、はじめて俑を作るものは胡適だと譏つた。

詩鐫は十一号で停刊になつたが、朱自清のいうところによれば、この一派、ことに聞氏の当時の詩界に与えた影響は非常に大きく、形式を顧みない従来の新詩の風が次第に規矩に上つて、格律詩が多く作られたさうである。この年夏、家族を携えて故郷に返り、そのまゝ再び芸專には戻らず、秋冬の間、招かれて吳淞の国立政治大学に行つたが、之も久しからずして長女の病のために又家に戻る。

やがて民国十六年の北伐革命となる。所謂大革命の高潮時期であ

る。前年一九二六年七月から、蒋介石は中共と合作して、革命軍総司令として、北方軍閥に対して北伐を開始し、この年二月、遂に武漢政府が成立する。文学史上から云つても大事な時期で、當時文学者の多くが茅盾、郭沫若をはじめ、蔣光慈、錢杏村など皆武漢に集つて革命の工作に従つた時である。

聞一多も友人の紹介によつて武漢に来て、政治部の工作に参加し、その芸術課々長となる。思うに聞一多は、唯美主義の芸術家として出発し、米國留学を経て烈しい愛國主義者となり、憧れの故國に歸つてその政治の混乱と腐敗に絶望し、出路なき「死水」の嘆きに悶えていたわけだが、こゝに新しい希望をもつて、この革命工作に加わろうとしたのであつた。

しかるに北伐の成功と共に、早くも國共の合作が破れ、武漢政府は解散となる。この革命の挫折によつて、多くの文学者たちは武漢を去り、或は革命に幻滅し、或は国外に亡命し、或は地下の左翼工作に潛み、或は國民政府と妥協し、さまざまの道を歩くことになるのだが、聞一多は一旦武漢政府に入つたものゝ、早くもその後一ヶ月で、軍中の政治生活に慣れぬ故を以てこゝを辞し去つてゐる。結局聞一多には場違ひの感が強かつたのだらう。畢竟、行動の人ではなかつたのである。

彼は呉淞の政治大学に返つたが、その学校が國民黨に接收されると、聞一多はさし当り仕事もなく、或は杭州にあそび、又上海に来て、唯美主義的なグループに属して、新月雜誌の創刊を議り、間もなく南京土地局に就職、又やめて中山大学の外国文学科主任となり、英米の詩や劇や散文を教えた。十七年一月、詩集死水出版（新月書店）、三月新月雜誌創刊、徐志摩、饒孟侃と共にその編

輯にあたり、詩作及詩論を新月に毎号発表する。八月同誌六号に杜甫を論じた文章をのせたのは、やがて彼が中國旧文學の研究に向う先声となつた。

秋、南京を離れて、武漢大學文學院長兼中國文學科主任となる。之が聞氏の、その後中國文學專攻に向うきつかけとなつたのだが、思うに幼にして中國の旧詩を学び、五四以後は新詩人として世に出たが、在米中も屢々杜甫李白陸放翁をよみ、ことに留學の結果、却つて故國の文化、中國の文學に強く心をひかれるようになった。革命工作からも後退した今、自つと自國の古典文學の研究に沈潜して行こうとしたのは彼として極く自然であり、又そのような気分になつたから武漢大學の中國文學主任を引きうけたものと思はれる。十八年四月には新月の編輯を辭退し、すつかり詩から離れて、ひたすら古典の勉強を心がけたらしい。莊子を論じ（十八年）、杜少陵年譜の力作を武漢大學の文哲季刊に發表した。（十九年。その翌年完了）。

だが武大も永住の地では無かつた。ストライキが起つて文學院長の彼は攻撃的となり、乃であつさり止めて、その秋青島大學文學院長兼國文科主任となり、文學史、唐詩の講義、そして英詩をも教えた。この頃もつばら力を注いだのは唐詩である。學生と語つて、談唐詩に及べば、全く詩人本來の面目に返つて、師弟の別も忘れて夢中に論ずる彼だつた。翌年詩刊が創刊され、彼は珍らしく「奇蹟」の一首を發表したが、已に三年間詩を書かなかつた聞一多の詩を見て、徐志摩は、三年不鳴、一鳴驚人の奇蹟だといつた。しかしもはやその後彼の詩人としての活躍は見られなかつた。武漢大學で一緒だつた游國恩も青島に来て、同じ建物の階上と階

下に住んだ。この頃開氏は游国恩と楚辞、詩経を日々論じた。游国恩が楚辞概論を書いたのはその翌年（民国二十二年）である。游所がこゝで又学校のストライキが起る。学則改正の要求を不合理と見た文学院長の彼は之をとり上げようとしなかつた。校長は楊振声、院長は梁実秋、劇作家の洪深もこゝに居た。皆古い友達であつた。この人々が攻撃の目標となつたが、実は省政府、市政府、鉄道局、教育部の、錯雑した政治勢力の葛藤の犠牲だつたといわれる。その時の標語に「不学無術の聞一多を駆逐せよ」とある。そのとき彼を支持した只一人の学生が臧克家であつた。不学無術の聞一多という語は私に興味が深い。古い中国の詩を掘り下げて見ようと、先づ唐詩、中でもその最高峯の杜甫に取組み、又もつと遡つて詩経・楚辞にも手をつけたが、彼として尙行く手に見透しも無く、いはゞ暗中摸索の時代では無かつたらうか。その時、学生のみならず、思ひ上つた同僚たちからも、無能と呼ばれ、無学と呼ばれて、その悩みは理解されなかつたのであらう。こゝに厭気がさしたのか、暑中休暇の後、山東を離れ、いよいよ別れて以来十年になる母校清華大学の、中国文学科教授として招かれる。（民国二十一年）主任は朱自清であつた。朱自清は詩人であり、散文家であり、この後の二人の友情は終に聞一多の死後その遺稿をこの人の手で編纂することになるのである。

こゝで聞一多にとつて、遂に中国古典文学の研究に専心出来ることのない場所が与へられたわけである。

清華の生活はこの後五年間、二十六年（一九三七）七月芦溝橋事変勃発までつゞいた。その間、彼の中国文学に関する業績は唐詩、詩経、楚辞、樂府、そして古代神話伝説の研究に及んだ。講

義もすべて之らに関するものだつた。

唐詩の研究は武漢大学に居た頃、杜甫の年譜の作成に力を注ぎ、青島でも杜甫をつゞけ、清華に来てからは岑參の繫年考証、交遊事跡などを発表して、学界に貢献した。しかし中国の詩の研究は遡れば漢魏、更に遡れば詩経、楚辞に到達する。詩経、楚辞こそ中国詩の母体であり、こゝから出發せねば中国詩の源流は明かにならぬ。聞一多は已に青島で游国恩と朝夕楚辞、詩経を談論したが、清華に来てから益々楚辞に親しんで、天問、天、離騷、解詁、敦煌旧鈔本楚辞首殘卷跋等をこのころ書いている。之はやがて晩年の屈原研究につゞくものである。当時私の最も敬服し、益を受けたのは彼の詩経研究であつた。詩経に関するそのころの研究は二十三年（三十六才）の巨齋尺牘、二十四年新台鴻字説、同じく高唐神女伝説の分析、二十六年詩経（二南）新義等である。巨齋尺牘の采芣の詩に関する論、狼跋の詩の解。ことに狼跋が旧説にいう周公に關係なく、むしろこの詩は一人の貴族のカリカチュアだとする仮説は大變愉快である。およそ詩を学ぶに、漢人は功利觀念に墮して詩経を政治讀本として扱い、宋人はいくらかまじだが、やはり尤もらしい道学から脱け切れず、清朝人の研究は客観的だが訓話に限られて、そこに詩はない。近人は科学的方法をとつてはいるが、如何せん唯物史観とか非唯物史観とかの論は詩から離れることすでに遠い。明かに一部の歌謡集であるこの詩経を何故文芸として扱はぬのであらうかと。

新台鴻字の説は、その詩の魚網之説、鴻則離之の鴻の字を聞氏は蝦蟆と解した。古人は蝦蟆を苦壘と呼んだ。苦壘は鴻の切音である。窟窿が孔であり、喉嚨が亢であるのと同じ。之を多くの旁証

を引いて証明し、鶉の字を以て突は醜いガマと解することによつて、始めてこの詩の意味が通じ易くなつたのである。こうした方法は清朝学者の考証法をもう一さう發展させたものであり、このような発見が詩経、楚辭に亘つて彼には少なくない。

一番興味深いのは高唐神女伝説の分析である。詩経侯人の詩の、薨兮薨兮、南山朝隄、婉兮孌兮、季女斯飢について、朝隄は虹、虹と美人との古くからの聯想。そしてこの詩と、楚辭にある宋玉の高唐賦の「朝為行雲、暮為行雨」という高唐神女伝説との關係を、楚民族の先住地を侯人の詩の作られた賈衛の地だと考えることによつて結びつけ、のみならず高唐神女を所謂高稷の性的祭礼と結びつけたその構想の大きさは人を驚かせるのである。その他二南新義には、前人の考え及ばぬ適解が多い。難解な行露の詩の誰謂雀無角の角を雀の髯として解し、標有梅の標を抛、擊として、この詩を古代男女擲果の風習で解するなど、まことに動かさぬところであろう。畢竟聞一多は詩経を経学として扱つた従来の訓詁解釈を打破して、民俗学的な考をも加えて、詩の国風を全く民間の歌謡として扱つた。彼はこれらの詩に古代の人民の声をきいたのである。この行き方は更に遡つて、古代神話伝説に及び、学校でも度々中国古代神話研究を講義している。(之はその後三十一年の伏羲考。又昆明に移つてのちの「龍鳳」などの文章、又民俗学的には説魚の一篇となり、楚辭系統のものとしては、司命考などの民間信仰から神仙考、道教の精神、端午考などの論文となつてあらわれる。)

國時に詩経國風の民歌の系統を降つて来れば、当然漢の樂府になる。こゝに注意したのであらう、当時(二十五年)樂府研究を講

義しているが、之が後に樂府詩箋(二十九年十月)となつていゝ仕事を残すことになつた。

こうして彼の中国古文学の研究は、その後になつて益々深められて行つたのだが、この清華大学の五年間は聞氏が現実の世界から退いて、専ら古典に沈潜した時代であつた。詩経に古代の民歌を見、その源流に沿うて樂府を見て、こゝにこそ文人とか貴族とかの弄んだ詩ではない、人民の歌の伝統を見出した。古典を学ぶことによつて、いつしか中国人民の心に古今を通じて流れているものに触れたであらうと思われる。

しかし聞一多が清華に於て、古典に沈潜している間にも、中國の危機は益々迫りつゝあつた。

遂に一九三六年七月七日、蘆溝橋事變勃発、同月二十八日北平陥り、八月五日、日本軍が清華園を佔領する。こゝに於て聞一多は急遽家族をつれ、僅か身の廻り品を携えて北平を離れて南下する。駅で出逢つた臧克家に蔵書の仕末を尋ねられて、国土日に失はれゆく今日、些々たる自己の蔵書を憂えて何としよう、と答える彼であつた。津浦線で南下、湖北の郷里に帰り、ついで武昌に移る。清華大学はこの時湖南に遷り、北京大学、南開大学と合同して、国立臨時大学を組織し、法理工三学院は長沙に、文学院は南嶽聖經学校に設けられた。朱自清は中国文学系主任で、聞一多もこゝに来て講義をつとめた。

臨大の生活は、後に聞一多も回憶しているように(余集年譜六一頁)、当時教授も学生も一同緊張と興奮の中であり、全国民動員の感情から、或者は政府の指示をも待たず、進んで前方に出て工作

に参加し、或は後方に在つて教育上に何らかの力を致した。ところが事實はそれが終に幻想であつた結果となり、人々の心は次第に又自分本来の持場の仕事にかえり、教授連は依然として講義を準備し、過去に教えた書物をまた教え始めた。その頃物価はまだ暴騰もせず、煙草が高くなつた位であつたし、南嶽にいては新聞も二三日おくれたし、「世界が我らを注意せぬと同じく、我らも次第に世界に注意しなく」なつた。日々の授業と散歩。半生の生活方式は容易なことでは改まらず、暫時のさわぎも只生活の表面に波紋を起させただけで、結局常態に復しようとするのであつた。當時はまだ何事も比較的のんびりしていたのだろう。馮友蘭もその頃を想い出して、当時の空氣は嚴肅だつたが愉快でもあつたと云つてゐる。(朱自清選集年譜五十七頁)

だが十二月には南京が陥落した。日本は更に進攻の勢を止めようとはしなかつた。戦局は益々深刻になつて行き、臨大は再度南遷の声が起り、翌二十七年一月全式に雲南移転を学生に佈告した。二月に入ると、臨大の学生二百余人は湖黔滇(湖南・貴州・雲南)歩行旅行団を組織し、聞一多もこの歩行雲南入りの団体に加はつて出発した。聞一多この時四十才である。

三月六日旅行団は沅陵に到達した。天氣は寒く、風雨から雹雪となり、さながら嚴冬の様であつた。恰度北平芸專が沅陵の対岸に移つて来ていたので、聞氏は曾つての同僚と逢ふことが出来た。又沈從文が沅陵の町に居て、聞氏らを歓迎してくれた。十二日湖南貴州の堺の晃県に達し、旅行団は撫水のはとりで夜会を開き、折から月光の下で、聞氏は桃花源(沅水の岸にある)の地名

の原始意義など語つた。

四月十一日盤江を渡り安南に到る。安南は小さい町で、二百余人の旅行団の食糧問題に行き詰り、学生たちが騒ぎ出し、聞氏らもこの夜、食事も取らず、睡りもせず、県役所に坐り込むなどのこともあつた。遂に四月二十八日昆明に達した。長沙を出てから、中国里数三千五百里の大旅行であつた。同じく二月長沙を出た朱自清は馮友蘭らと共に自動車で桂林へ出、鎮南関を経て河内に到り、それから三月十四日には早くも昆明に先着していた。しかるに聞氏がこの時二百余人の学生と共に、この長い路を苦しい徒歩旅行を続けたことは、聞氏に大きな何物かを与えた。途中の名勝古蹟を写生もしたし、辺地の民謡を蒐集もしたし、苗族の服装、語言にも深い関心をよせた。誰も皆鬚面になつた。昆明に着いても、昆氏はその鬚を剃らなかつた。抗戦勝利の日までは、と答えた。

だがそんなことではない。衆と共にした此の大旅行は、聞氏にもつと何かを与えたのである。この旅行を体験した後の聞氏には、何か違つたものが出て来ていると思う。沿途いたる所で人民の苦難の生活に触れ、明け暮れに青年たちとその艱難を共にした。聞氏はこの行動を通して、始めて心の開くものがあつたのである。

長沙臨時大学は昆明に来て国立西南聯合大学と改称し、理工学部は昆明に、法・文学部は蒙自に設けられた。聞氏は教員宿舍に住んで、その二階で終日研究をつづけた。同僚はその二階を「何妨(何妨)一下楼」と呼び、聞氏も自ら何妨一下楼主人と洒落れて云つた。その間にも日軍の飛行機は頭上に飛び、或日は恰度子供を学校に迎えに行つての帰り、爆弾の破片で頭部に負傷した。或日は聞氏

一家の防空壕に爆弾が落ちた。

その爆撃下に在つて、聞氏はその研究を益々進めた。聯大では爾雅、楚辭を講じ、楚辭天問疏証の稿を四度目に改め、又中国上古文学史講稿の一部として「歌と詩」の一文を著し、本来、歌は叙情的、詩は記事的なものをその本質としたことなどを論じている。二十八年の夏、曹禺が自作の「原野」を演出し、聞氏は舞台と衣裳の設計をした。馮夷に宛てた手紙に

「十余年来、考証学を専攻し、古書に埋れて生活している中に、自分の精神は枯渴に瀕したかと思つた。抗戦後、ことに徒步旅行二ヶ月、朝夕同学の青年と共に居り、遂に童心復び萌して、沿途風景百余枚を画き、昆明に来て後二度も演劇に参加した。知らぬ者は前日の教師と全く別人だと思つたらしいが、実はもと／＼の自分が恢復したわけだ。」と云つてゐる。

この頃又詩経、楚辭、樂府、神話の旧稿を整理し、易経に古代社会研究資料を尋ね、詩歌舞蹈、戲劇諸部門の起源と發展を研究して居り、「樂府詩箋」、「いかに九歌を讀むか」「周易義証類纂」などを発表した。清華の研究所が出来ると、中国文学部は聞氏が主宰して、昆明郊外で仕事を始めた。

三十一年楚辭校補成り、十年來の楚辭研究の結果をまとめた。十二年にも學術論文を多く書いた。莊子内篇校釈も發表された。これも勞作であつたけれども、今や彼の莊子に対する見方は、かつて民国十八年、新月に掲載した論文莊子に見えているやうな、莊子に陶醉し、莊子の道に憧憬する態度とは判然と異つてゐた。いわゞ莊子の思想を揚棄せんとしたもののおようだつた。それは翌三十三年の、「儒・道・土匪」の文章などにも明かである。

臧克家に与えた手紙（三十三年十二月）は聞一多のこの時達した心境をよく伝えるものである。

「……君は私が古書の中で何をしているか、その目的は何であるかを知らない。それは、君が私に従つて学んでいた頃は、私の仕事をやつと始められたばかりだつたから。これは君の不幸だと言えよう。あの青島時代（臧が聞の学生だつた頃）からもう十数年たつている。この十数年の古書に埋れた生活を経て、私はどうやらその中に自信が出来た。私は、我々の民族、我々の文化の病症を見極めて、之に処方を与えようとする。その処方形式は、文学史だか、詩だか、私は知らぬし、そのどれも無いかも知れぬ。その最後の処方を形成し得るか否かは、やはり環境が許すか否かに依る。（百斤四千元の米と、八人の家族を想像してくれ給え）。但、私の歩み方は間違つてはいないと思う。君は思ひも寄るまいね、私は誰にもましてあの古書を恨んでいることを。恨んでいればこそ、その正体をはつきりさせずに居られぬのだ。君は私を誣いて、私を一個の蠹魚だと思つてゐるようだが、実は私はシミを殺す芸香（書物の虫を殺す草）なのだ。どちらも書物の中にかくれているが、そのはたらきは決して同じでは無い。

君は又何かと云えば人のまねして、「死水」の作者は技巧に長じていると云う。この冤罪を私はどこに訴えよう。私はどこに私の技巧があるか見出せないのだ。私は自分を爆発したことのない一つの火山だと思つてゐる。火は内に烈しく私を焼いても、結局私をとちている地殻を炸裂して、光と熱を放射する能力が無いのだ。しかし僅かの久しい友は、私が胸にこの火を抱いていることを知つてゐる。「死水」の中にも私の火を感じとつてくれるのだ

う。私を技巧家だというものには勝手に云はせておく。克家よ！つまらぬことを言はずに、よく考えてみてくれ。」

曾て自分の、今思えば恥しい、余りにも未熟だった頃の自分の学生が、現在の自分の心境を知ってくれぬじれつた。臧克家は青島時代から自分を信じてくれていた。然しその後自分の達した心境を知ろうとはしてくれぬ。自分は決して古典の考証に耽つて、それで満足しているのではない。私は決して芸術の形式美のみを、修辭の技巧のみをよしとしているものではない。私の内には燃えているものがある。それがいつか殻を破つて、我と我身をやき尽す時が来つゝあるのでは無からうか。

三三年の五月八日、聯大図書館前の広場で開かれた晩会に於ても、新文芸と文学遺産の題で講演をしているが、この講演で彼は同じくこの時発言した馮至、朱自清、沈從文、李広田、下之琳、孫毓棠、聞家驊、楊振声の八教授を新文芸建設の人々であるとし、之に対して自分と羅常培氏とは旧きものを破壊するのが役目だと云つている。

「五四の任務はなほ完成されていない。我らは科学を求め、民主を求め、孔家店と封建勢力とを打倒せねばならぬ。文学遺産については、五四以前は国粹と呼ばれ、五四の時代には死文学と呼ばれたが、現在は又文学遺産の看板を借りて、復古をねらっている。もともと中国封建社会には四種の家来がある。第一は主人に絶対に忠実な儒家。第二は法家、第三は墨家。そしてこの三種のほかは、現実をさけて象牙の塔に引込む莊子の一流がある。五四では第四の人も塔を出た。所が塔外の生活に慣れぬ為めに、再び塔に帰つて了つた。そして前三種の人が又活躍し始めているのだ。」

昆明に於ける日々生活は益々困難になつて来た。聞氏はかねての技術を資本として、篆刻の仕事を始め、それで些か生活を援けようとした。昆華中学の国文の教員をも兼ねて働いた。その頃のことであつた。聞一多の甥が教導団に入つて従軍していたのが、昆明を通り過ぎて、彼を訪ねて、軍隊の腐敗暗黒をまざぐと語つて聞かせた。このことは彼に非常な刺戟を与えたものゝやうで、このあと門を閉ぢて出ず、今後自分の生き方について考えつゞけたらしい。過去のように、ひたすら書齋に埋れて世事を問わぬか、それとも書齋を出て、義に仗つて発言をするか、沈思七日、遂に彼も一個の國民として今日の政治に関心すべきことを決心したのだつた。「他人は我々に立ち騒ぐなという。しかも我々はじつとしてはいらぬ。我々は幼稚であるかも知れぬ。だが国家がかゝる地位にまで立ち到つたとき、我々が捨てゝおいて誰がかまつて呉れるだろう」。そして事実この後は聯大學生の会の邀えに應じて、屢々時事及び政局問題について発言している。

ところで八月の初め、第五軍々長が昆明に来て、軍部挙行の時事座談会が催され、聞氏、馮友蘭ら十一名の教授も参加した。その時聞氏は発言した。「従来吾々は各方面の行きつまりを見て、僅かに軍事上に於てはまだ方法が残つているものと思つて来た。只今長官各位のお話を伺つて、始めてもはや軍事上にも全く方法が無いことを知つた。」と。そして最後に人の意表に出ることを言ひ切つた。「今や只一つの路あるのみ、——革命だ」。会場は途端に啞の如くなつた。

それから間もなく、流言紛々として、聯大当局は聞氏らを免職するとか、特種人物が聞氏の暗殺を計画しているとか。一學生が聞

氏に危険を告げて自重をすゝめたとき、彼はハラ／＼と涙を流して云つた。「私は思う、多くの青年が余りに冷淡だ。誰しも心があり、血があるのだ。私には政治はわからない。然し今日になつてまだ、我々は一身の安全を考えていたらどうか。君の注意はありがたい。しかし私は何より人間でありたいのだ。私にはまだ良心がある——」。

その年雙十節の記念大会の講演でも語つてゐる。「この数月の間に鄭州も落ちた、洛陽も落ちた、長沙も落ちた、衡陽も落ちた。今や又桂林も危い。柳州も保つまい。抗戦最後の根拠地大西南は脅威を受けてゐる。敵がいつ貴陽、昆明、重慶に進攻せぬと保証出来ようか。その時になつても、我らの軍部は何をしてゐるだろう。相変わらず国民同志で、監視するものは監視し、監視されるものは監視されるのであろうか。国家は人々自身の国家だ。人民の血汗をもつて養つた軍隊をもつて、何故人民のために敵に抗しないのか。……国土を守る最後の力量は、恐らく我ら人民自らの上にある。一切のものが皆頼りにならぬとき、最後にたよるべきは我々人民自身である。今日政府は人民に自由を与えぬ。これは政府が人民を必要とせぬのだ。いよ／＼その日に至つて、我ら人民がよく自力更生の方式を以て起ち上つたら、政府も自づと我らを必要とするだろう。が、その時我らは誇らかに言う、我らは汝を頼まぬ。汝は我らに頼まうとするのかと。これこそ本當の民主であり、我らは今日この民主を争ひ取りかねばならぬ。我らは急いで組織せねばならぬ」。

又、西南聯大の、従軍から帰つて来た学生への講話の中に、「尙今一つ言うべきことは、知識分子にして始めて仕事が出来て、ほか

の者には出来ぬ、という考え方は誤つてゐる。知識分子にして始めて力量があるのではない。真正な力量は人民にあるのだ」という彼でもあつた。

今こそ腐敗した政府を信ぜず、人民自身の力によつてのみ中国の再起を望み得ると信じた。中共解放地区の行き方を聞き、又文献をよんで彼の考はますます固まつて行つたと思う。国民政府はこの時国内に於ける共産党の勢力が日々に拡大されてゆくのを見て、言論の弾圧はいよ／＼激しく、人民勢力の擡頭を躍起となつて圧迫した。特務機關の暗黒な活躍はいよ／＼奇怪なものになつて來てゐる。然し誰が考えても、已に中国の生きる道は、たゞ人民の力を結集する以外に無いことは明かであつた。

十月十九日の魯迅逝世八週年記念会で彼は講演した。「従前我らは北平で魯迅を罵つた。(高踏派たる新月一派は魯迅と絶えず争つた。)彼を侮つた。今こそ私は彼に向つて懺悔する。我々は誤つて魯迅を罵つた。魯迅が正しかつたのだ。我々は錯つていた。我々は清高を欲したが、そのためにみす／＼国家をかゝる地位にまで追いやつたのだ」。

馮夷の回憶の中に引く昭琛の手紙に、「聞一多先生は近来非常な熱情で国事に対して進歩を主張して、そのため当局及び聯大同人に忌まれてゐる。然し老いて益々壯で、教授の地位を見ること敵愾の如くである。昆明の憲政促進会は聞先生の推進力が大きい。雙十節の記念会でも宣言を朗読し、態度激昂、群衆は甚だ感動した。そのほか現に貧病作家を援助し、魯迅を記念し、文協及び青年の主弁する刊行物を援助すること少なからず、態度の真剣なること、小生の十年來僅かに見るところ」と云つてゐる。かつ

ての死水の詩人聞一多はいまや民主運動の先頭に立つている。我々は彼の態度にこの時已に悲狂なものを感ずるであらう。けれどもその間学問研究を捨てたのではない。翌年の詩経通義は従来彼の國風研究の決算であつたし、殊にこの一、二年彼が心を注いだのは屈原の文学であつた。楚辭は早くから彼の興味をもつたところであるが、今や彼は屈原を人民詩人、愛國詩人として称揚したのであつた。彼の研究によれば、屈原は楚の同姓とはいえ、宮廷に於ける一個の弄臣であり、いやしい佞官であつた。古代の文学者は畢竟、宮廷の弄臣、侏儒俳優の徒であつたから。彼屈原も亦王公らにふみにじられた一人であり、人民大衆の一人であつた。第二に屈原の作品離騷は人民の芸術形式であり、九歌が民歌であることは誰しも認めるところ。第三に離騷は統治階級の罪惡を曝露し、彼らの罪状を嚴重に批判する。当時その怒りを口に出せぬ人民に一つの安慰を与え、人民の正義觀を高くうたつてゐる。第四に屈原が人民に愛され、崇敬されるのは彼の行義であつて文字ではない。屈原の離騷は楚國人民の反抗の情緒を喚び醒ました。彼の言行は一として人民と配合せぬものはなかつた。陶淵明は農村を詠つたが、農民は彼を必要としなかつた。李白は酒肆を詠つたが小市民は彼を要しなかつた。彼らが人民に属せず、人民のために詠つたのではないから。杜甫は真心もて人民のためにうたつたが、人民は彼のことばが解らなかつた。屈原こそ人民の痛苦を訴え、その死は永久に人民に悲しまれ、かの端午の習俗も、屈原の故事に結びつけられて今日に伝つてゐるのだと。

この議論に直ちには賛成できぬ点もあるうし、第一屈原の文学を如何に見るかということに甚だ問題がある。たゞこの際聞一多が

屈原の離騷という古典文学を、この様に取扱うに至つた点を察するのである。

(尚この屈原論には少しきさつがあるので、その少し前頃、成都で孫次舟という人が、「屈原崇拜者に答ふ」と題して、屈原は古代宮廷の文学弄臣にすぎなかつたという説を言い出して、大變な攻撃を受けたことがある。その際孫氏の言に、昔、聞一多先生にも類似の説があつて、屈原を梅蘭芳に比したものがあつた云々、といつた。之を朱自清から聞かされて、聞氏は黙つていらなくなつたり、弄臣云々は屈原を貶すものでなく、却つて光榮であるという意味を書いたのである。郭沫若はこれについて云つてゐる、我々は別に屈原の爲に身分を争はうとはしない。まことに聞氏のいうが如くんば、屈原は奴隸にして解放を図つたもので、益々貴ぶべきであらう。しかし我々の求めるのは眞実である。屈原が弄臣、或は奴隸の出身であることを証明しようには、証拠が依然として不充分である、と。——今昔蒲劍集序)

聞一多が民主同盟に加入したのは三十三年の夏頃だつたらしい。中国民主同盟は、國・共兩党の他の第三勢力を代表する統一戦線を形成した。抗戰末年、國・共兩党の關係が險惡になると共に、国民党の政策は一々反共的になり、独裁的になつて行つた。内戰の不安が色濃くなり、国民党以外の党派をすべて非法化する勢になつた。こうした中に一九四一、中国民主政團同盟が香港で結成されたが、之が一九四四(民國三十三年)中国民主同盟と改称され、愈々抗戰最後の段階に於て、國・共間に立つ唯一の民主黨

派として中国民主化への闘争を行つたのである。かくて内戦の危機をはらんだ国共両党の間にあつて、進歩的なインテリゲンチヤを吸収しつゝ、次第にその政治的勢力を増して行つた。一党専制の終結、挙国一致政府の結成。正式国民大会挙行の準備、言論出版集会の自由の保護等を要求したのである。

一九四五年八月、日本は遂に無条件降伏をした。人々と共に歡喜に躍り上つた聞一多はすぐに町の小さな床屋で八年間ぼう／＼としていた鬚を剃り落した。子供たちは手を拍つて囃した。

九月民主同盟中央執行委員、及民主同盟雲南支部宣伝委員、民主週刊社々長となる。抗戦は終つた。しかし中国の暗澹たる夜はまだ明けぬ。国・共内戦の空気が日にまし強く、焦燥した国民党反动派の行動は益々横虐になつて来た。

十一月二十五日、聯大その他学生の晩会では、開会後間もなく、校外四囲を軍隊に包囲され、機関銃を以て会場に威嚇射撃をなし、銃声の中に数名の講演を了へて散会した。昆明の学生聯合会は省政府に迫つて、言論集会の自由を要求した。その後間もない十二月一日のことであつた。午前九時から午後四時までの間に、暴徒数百名が、雲大、中法、聯大工学院、師範学院、聯大附中等を襲撃し、教員一名、学生三名を射殺し二十名を傷けた。聞一多はこの昆明学生惨案座談会の席上、これこそ中華民國最黑暗の日だといつた。かつて魯迅は民国十五年三、一八の惨案に、この日を中華民國最黑暗の日といつたが、更に民国三十四年十二月一日にかゝる日があることを予想しなかつたのである。四烈士の血を空しく流させることは出来ぬと。人・獸・鬼の一文はこの時書かれた。

この事件についても種々謠言が行はれた。聞一多は学生のために辯護して却つて無情な蔑視と攻撃を受けた。間もなく聞氏の首に四十万の賞金がかけられているとの噂さが立つた。しかし彼はそれには全く無関心であつた。

三・一八に於て、段祺瑞政府のために暴虐にも射殺された学生を見て、聞氏は之を美しい詩だと云つた。今や聞氏は己にその昔の聞一多では無かつた。彼は己に生命をかけている。今や彼のこの態度を所謂進歩的文化人などゝ視て了ふことは謬であらう、彼の内に燃えるものは遂に殻を破つてはとばしろうとする。

三十五年五月、昆明の聯大も解散し、清華大学は北京に帰ることになる。聞氏に対してはカリフォルニア大学から招聘があり、清華の文学院院长馮友蘭からも渡米をすゝめられたが行かなかつた。北京で学生が彼を待つていくれるであらうから。

然るにその頃昆明の街の所々に、民主同盟の聞一多、楚図南は共產黨員であり、聞一多は暗殺団を組織して居る、又李公樸は数億元を携えて雲南に来て、ひそかに暴動を謀つているという壁新聞が続いて貼られた。

六月、楚図南の家に友人が集つた時、一人の友人が題字を求めた泥金の扇子に、聞一多はしばらく考えていたが、彼の得意な小家で楚辭の二句、「長太息以掩涕兮、哀民生之多艱」と書いた。七月十日前後には家人をつれて、飛行機で重慶に飛び、更に北京に帰る予定であつた。

六月二十六日から二十九日にかけて、民盟雲南支部では聞一多はじめ主なる人々が、党・政・軍各機関の首長を招待して、民主同盟の立場、主張を説明した。聞氏は云つた、

「民主同盟は大部分が知識分子であり、文弱な書生であり、我らのよくする所はたゞ我らの手もて我らの良心の書かんとするものを書き、我らの口もて我らの良心の言はんとする所をいうのみ。今や我らは民主和平が中国唯一の出路だと信ずる。各界の人に呼びかけてこの和平の要求を共同支持してほしいと思う。我らの手はきれいだ。血の跡は無い。永遠に血の跡はありえない。この清潔な手で、遍く血の跡を拭ひ去り度い。我らは和平以前の方式もて国事を解決しようとする。ことに反対する。故に我らは内戦に反対する。暴力に反対する。」

その日会を終つて後、気がつくと来賓名簿は誰かに持ち去られていた。そして会場を貸した商務酒店は脅迫を受けた。

同じ月彼が書いた楚辭九歌古劇懸解は、九歌を劇の様式に仕立てたものだったが、恐らくは之が彼のこうした仕事の最後であつたらう。

七月十一日は、聯大復員学生の最後の一団が昆明を離れる日だつた。その晩十時頃、李公樸が青雲街で刺され、翌日雲大医院で死んだ。李公樸はかつて一九三六年抗日七君子の一人として国民政府によつて投獄された男である。民主同盟の中でも、かねてねらわれていた人であつた。

李公樸の死に駆けつけた聞一多は涙を流し、遠方を凝視して、一字々々、公樸は死なぬ、公樸は死なぬ、と独り言した。この日青雲街一帯に漫画と壁新聞が貼られ、それには李の死は「桃色事件」のためだと書いてあつた。又雲南反共大同盟の標語には、李公樸は共産党が殺したのだとあつた。

十五日、早朝、友人が訪ねて来て、聞一多に身辺を注意するよう

に云い、確実な情報によれば民盟の責任者と民主刊物の責任者十数人を逮捕するらしいとのことだつた。しかし聞一多は微笑して「事已に此に至る。自分が出ねば何事も停頓するばかりだ」といつて、李氏の死による善後策をいろ／＼処理し、民盟支部の工作を続けた。折から夫人の心臓病が重くなり、一家緊張の中にあつた。

同日午前十時頃李先生治喪委員会は雲南大学を借りて開会した。李氏の夫人が泣いて声を成さず、扶けられて壇を下りた後、聞一多が立つた。

「諸君も知らるゝとおり、この幾日は昆明に於て歴史上最も卑汚な最も無恥な事件が起つた。李先生は畢竟何の罪を犯してこの毒手に遭つたのか。彼はたゞ筆をもつて、口をもつて千万人民の心中に圧えられた思をのべたに過ぎぬ。何の爲めにこの人を殺したのだ。而もこそごと。」

今日この場に特務がいるか。いれば起ち上れ。そして言え、なぜ李先生を殺したのだ。人を暗殺しておき乍ら、なほ人を誣いて、桃色事件だとか、共産党が共産党を殺したとか、恥知らず。

去年十二月一日、昆明の青年学生が内戦に反対して屠殺された。今や李先生は民主和平をとなえて反動派に暗殺された。特務らよ、想え。汝らになほ幾日が残っているか。真理は必ず勝利する。反動派の無恥は李先生の光栄である。反動派の末日は即ち我らの光明だ。我ら昆明の青年は決して汝らの横暴を許さぬ。歴史が昆明に賦予する任務は民主和平だ。我ら昆明の青年は必ずこの任を完成する。……

『大会は約二時間を経て散会した。聞一多は同様に守られて聯大

教員宿舎に帰つた。その時は正午十二時。午後一時半、午睡からさめて、楚函南が来て茶を飲み、一緒に府甬道の民主週刊社の記者招待会に出席した。その時羅紗の帽子を横にかむつた者が二人三人と街に散らばつていた。招待会の席上、聞一多は反動派の内戦を惹起した経過を詳述し、最後に感慨深げにこう言つた。

「我々は国民党に対して、決して原則も無く一貫して反対して来たのではない。孫中山先生在世の時、我らは国民党に対して、極めて大きな希望を抱いていた。孫中山先生の追悼会の遺像は私が画いたものだった——」

五時に散会し、小憩の後、楚函南と先後して週刊社を出た。長男の立鶴はその門口に立つて先生を待つていた。楚は急いで先に行き、先生は立鶴に伴はれて寓居に向つた。その時府甬道には人影も無かつた。聞氏父子は二人共歩きながら新聞を読んでいた。聯大教員宿舎の僅か十歩手前まで来た時、突如銃声おこり、先生まづ倒れ、立鶴はいそいで父の身上に伏した。銃弾は立てつゞけに飛来した。立鶴は大声で「人殺しだ、助けてくれ」と呼んだ。が忽ち先生の身体から五六尺そこところがつた。先生は満身弾痕、血は泉のやうに噴き出て、顔色蒼白となり、唇が微かにふるえたが、たちどころに息絶えた。立鶴は右足已に断え、地上に伏して死を装ひ、ひそかに見ると、何人かの壮漢が一行に、彼らを離れること三十尺のところに並んで、つゞけさまに彼らに向つて射撃した。立鶴はようやくつとめて起き上つたが、胸先きの三つの傷口から大量の血が湧き出て、努力して爬いのぼつて父を救はうとしたが何ともすべが無かつた。立鶴は医院に運ばれて後、漸く気がついて、父の已に死んだことを知ると、たゞ「私は父にすま

ぬ。私は父を守れなかつた！」というばかりであつた。

同月十六日正午、李公樸の遺体は雲大医院の門前の空地で火葬にされた。同じ十八日午前九時、聞一多の遺体は同じ処で火葬に附された。『この最後の項』の中は、全集年譜の記録をそのまま訳出した。

聞一多は四十八才、彼の亡きあとには、その妻と、子女五人が残された。身後蕭条として一も長物無く、残された家屬の生活、子女の教育費が直ちに問題となるのであつた。

(一九五五、四、二九)